

# 認知行動学と知識論

青木滋之 (Shigeyuki AOKI)

日本学術振興会特別研究員 PD (名古屋大学情報科学研究科)

伝統的認識論における知識分析とは、ごく大雑把に言えば、概念分析に基づいた知識の定義の探究であったとすることができるだろう。つまり、我々の日常的な知識概念をその構成要素へと分解すると、「正当化された」「真なる」「信念」が取り出される、というのが伝統的な(少なくともゲティエ反例以前の)知識分析であったと考えられる。ゲティエ反例以後の、知識の因果説(Goldman 1967)や反事実条件説(Dretske 1971)、因果説を拡張した信頼性主義(Goldman 1979)についても、ゲティエ反例を弾く条件を我々の知識概念に照らして書き加えていくという点において、伝統的な概念分析アプローチの延長線上にあると言える。こうした概念分析を主体とした分析的認識論に対し、近年、知識を自然現象として捉えるコーンブリスは、知識概念ではなく知識現象そのものを探究することを提案している。本発表では、コーンブリスの自然主義認識論および、認知行動学(cognitive ethology)が知識論に与えるインパクトについて考察を加え、認知行動学からの成果がどのように伝統的知識論を変貌させていく(可能性がある)のか、「正当化」「真理」「信念」という知識の各構成要素に即して分析を試みたい。

なぜ認知行動学なのか。ベルムデス(Bermudez 2006)が指摘するように、どの自然科学分野に基盤を求めるかに応じて自然主義認識論の実態は大きく変わる。また、どの段階において自然科学と知識論が関連性を持つのかについても、自然主義認識論者の間には見解の相違がある。例えば、コーンブリスも採用する信頼性主義の提案者であるゴールドマンは、知識の定義の段階では概念分析(分析的認識論)を行い、それに続く信頼できる信念獲得プロセスの決定の段階において認知科学を援用している(Goldman 1986)。

本発表が扱うコーンブリス流の自然主義認識論は、概念分析を主体とした分析的認識論を拒否し、知識の本性について漸次的に経験的に明らかにしていくというアプローチを採用する。そして、その際に有効な手掛かりとなるのが、知識という自然現象を扱う自然科学としてすでに確立されている認知行動学である。認知行動学は、鳥類・哺乳類(主に霊長類)を対象とした動物知識(animal knowledge)についてすでに多くの発見をもたらしているからである。そしてコーンブリスは近年の著書(Kornblith 2002)において、認知行動学からの幾つかの事例研究を通じ、「信頼できる仕方でも生み出された真なる信念(reliably produced true belief)」という知識の定式化へと至っている。

このコーンブリスによる知識の定式化は、あくまでも自然現象としての動物知識の諸事例を分析した結果として取り出されている点において、明らかに伝統的な概念分析(分析的認識論)とは異なる方法論に拠っている。しかし結果的にはゴールドマンの信頼性主義を踏襲した形になっており、定式化という点からすれば伝統的な分析的

認識論と大きく変わらない。つまり、もしコーンプリスの分析が正しいのだとすれば、動物知識を経験的に探究しても、従来の概念分析（分析的認識論）よりも多くの知見が知識の本性的にもたらされない、ということになってしまう。

本発表で私は、認知行動学が（コーンプリスが主張するよりも）もっと多くの知見を知識の本性的にもたらすことを主張したい。分析的認識論の成果である「正当化（および信頼性）」、「真理」、「信念」のそれぞれに対し、認知行動学は重要な点において補足・訂正を加えるように思える。

「正当化」...動物知識はそうした内在的な正当化が知識の構成要素ではないことを示す典型例である。さらに外在的な信頼性についても、どのような動物の認知メカニズム（空間・対象、因果、数、推移的論理などの把握）が、どれだけ信頼できるのかについての詳細な情報を、認知行動学はもたらす。

「真理」...認知行動学者が強調するように、動物知識において重要であるのは捕食といった眼前の問題解決ないしタスク処理である。これは、真理が知識の構成要素（ないし目標）であるという伝統的な知識論に大きな疑念を投げかける。さらに、そうした問題解決能力は領域に特定の（domain-specific）であることから、動物知識が何らかの共通した意味での真理を構成要素として持つと考えるのは困難になる。

「信念」...認知行動学者が動物に信念（や知識）を帰属させるとき、この信念は言語を前提とした命題的態度の1つとして位置づけることは不可能である。にもかかわらず動物知識が成り立っていることを考慮すれば、我々は信念（および知識）が言語能力によって支えられていると考える理由を失う。

以上の分析が正しいとすれば、認知行動学が語る動物知識は、従来の知識論における知識分析に少なからず訂正を迫るように思われる。

もちろんながら、伝統的な知識論の立場からは、動物知識から人間知識へのアナロジーは不適切であり、高度に知的で哲学的に興味ある知識とは、言語能力を前提とした内在的な「正当化」、一般的「真理」、命題的「信念」をめぐるものであるという直観、根強い反論が予想される。そこで本発表では最後に、ソウザ（Sosa 1985）による動物知識と反省的知識との区別と、それに対する近年のコーンプリスの議論（Kornblith 2004, 2006）を手掛かりとしながら、むしろ知識の典型例でありパラダイムケースとなるのが動物知識の方であること、さらに（認知行動学の成果が示すように）動物知識は十分に知的な営みとして哲学的な考察対象たりえること、を明示したいと考えている。